施率は低い。
今回のモニタリングによって、個々の低いタイミング場面(認識が実践に繋がっていない場面)が確認できた。その結果を、フィードバックすることで、スタッフからは「自分の手指消毒が出来ていない場面が具体的に見えた。低い場面を意識して、これからは手指消毒を行う。」という感想が聞かれ、改善に向けた意識の変化が伺えたと考える。

Ⅵ. 結論

1. 低いタイミング場面を認識することが、遵守改善には重要であると考える。
2. 医療・看護行為の内容によって、タイミング場面の実施率には大きな差があった。
   教育された認識は、行動として実践されていない「ずれ」が、個人使用量の差であり遵守に影響した要因と考える。
3. 現状をフィードバックすることで、個々の手指消毒剤の使用量が増え、手指消毒剤に対する意識の変化が、遵守率向上に繋がったと考える。

おわりに

今後も手指消毒剤遵守率アップに向けての、取り組みを継続して行こうと思う。

参考文献
医療施設における手指衛生のためのガイドライン　2002大久保害訳　メディカル出版
CDC「医療現場における手指衛生に関するガイドライン」2005　2007
看護師の手洗い行動および認識のずれに関する検証　2008山本美紀　休波茂著者　日赤十字看護学会誌
手指衛生の改善ための手引き　2007満田稔　医療の質改善協会
感染対策の見逃せないポイント37　2012　メディカル出版

演題 095

在院日数短縮をめざして ～アンケート調査に基づいた看護科での取り組み～

発表者 **小原　佳枝**（岩手県：奥州市国民健康保険まごころ病院）
共同研究者　佐藤　ゆかり、高橋　真由美、佐藤　智佐子

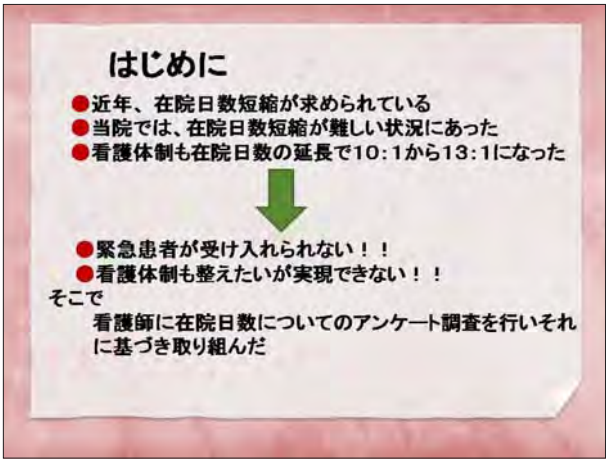
＜はじめに＞

近年、医療の質の向上と効率化を図るため、在院日数の短縮化が求められている。しかし、高齢社会のための老老介護や高齢者の独居生活などが原因で、当院では在院日数の短縮が難しい状況にあった。更に、平成23年８月から看護体制も在院日数の延長で10：１から13：１になっている。

当院は48床の小規模病院であるが、自宅で在宅医療を受けている患者を100名以上抱えており、県内外からの転院患者も積極的に受け入れている。しかし、満床が続き、緊急患者の入院を断らなければならないことも多々あった。

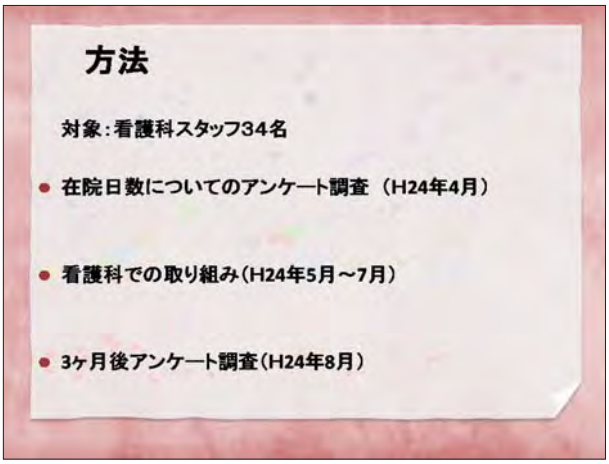
私達は、在院日数を短縮し入院のベッドを確保したい、そして看護の質の向上を図るために、10：１の看護体制に戻したいと考えた。

そこで、看護科対象に在院日数についてアンケート調査を行い、それに基づき取り組んだ結果を報告する。



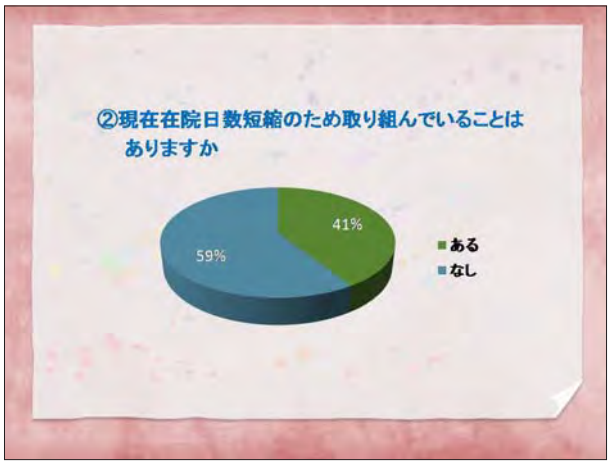
＜方法＞

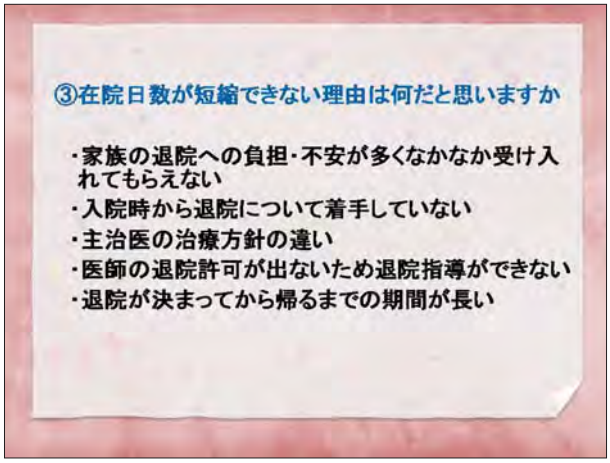
初めに看護科対象に在院日数についてのアンケート調査実施。その後、短縮のための取り組みを３ヶ月間施行。再度アンケート調査を行った。

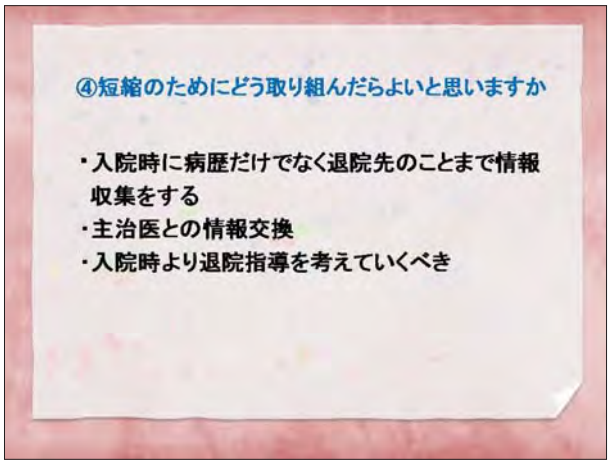


＜結果＞

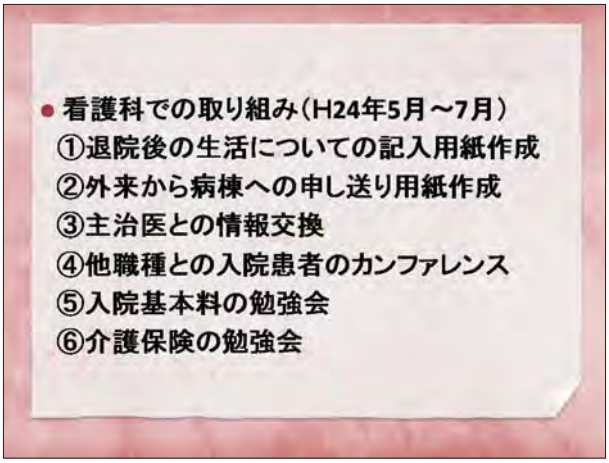
事前アンケート調査の結果、ほとんどの看護師が在院日数について考えてはいるものの、実際には取り組めていない事がわかった。



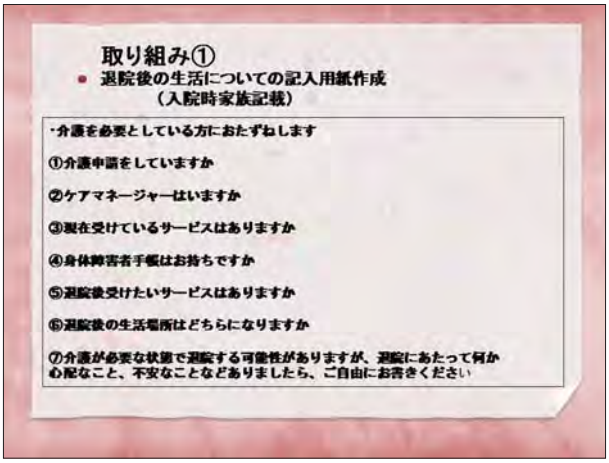




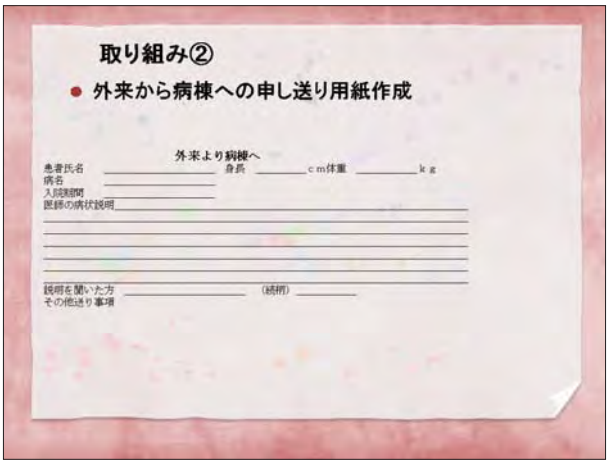
そこでアンケートより得られた意見を参考に具体的な取り組み項目を挙げ取り組んだ。項目は次の通りである。順を追って説明する。



取り組み①　入院時に退院後の生活の場を確認し御家族の方から不安や希望などを記載していただくことにより、早期に患者・家族と情報を共有するという目的で作成した。

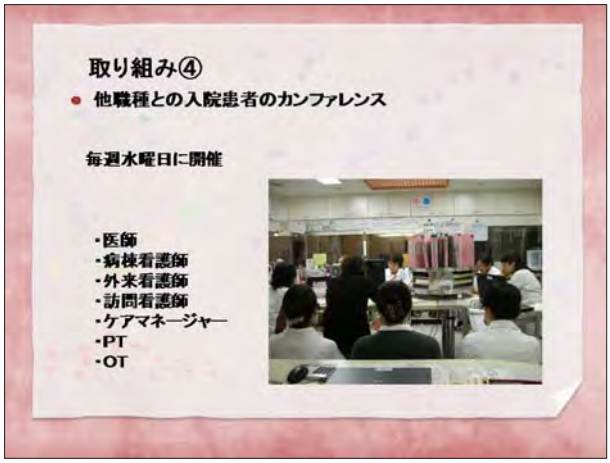


取り組み②　外来における入院決定時の医師から患者・家族への病状説明を、病棟でも把握する目的で作成した。

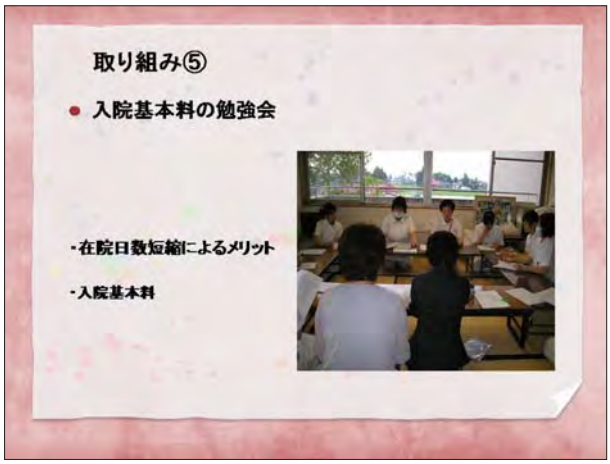


取り組み③　受け持ち看護師は、患者入院後10日前後に主治医に病状と退院の目途・退院指導内容を確認することとした。

取り組み④　カンファレンスで退院指導の進捗状況や患者の状態などを情報交換した。



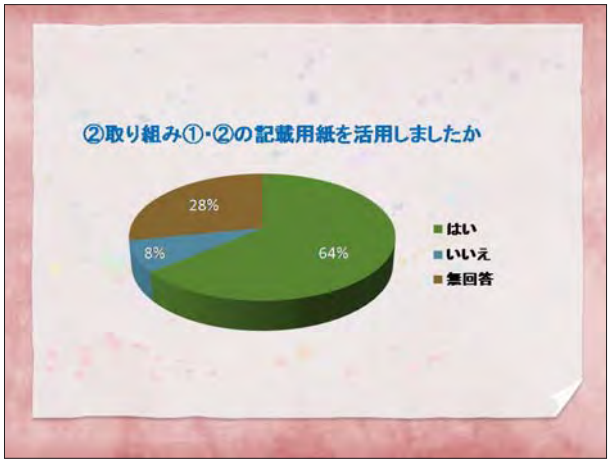
取り組み⑤　在院日数短縮によるメリットや入院基本料について当院看護師長による勉強会を行った。

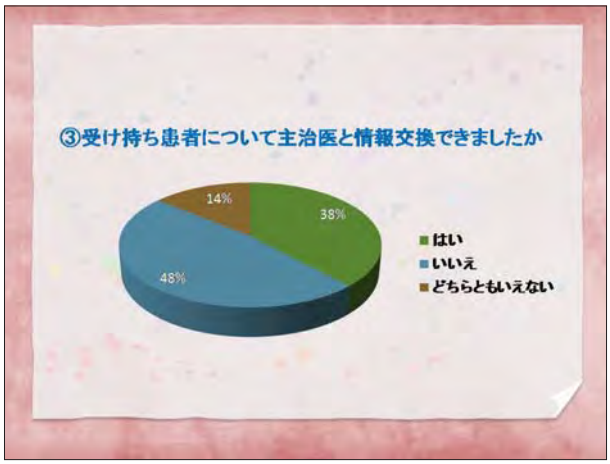


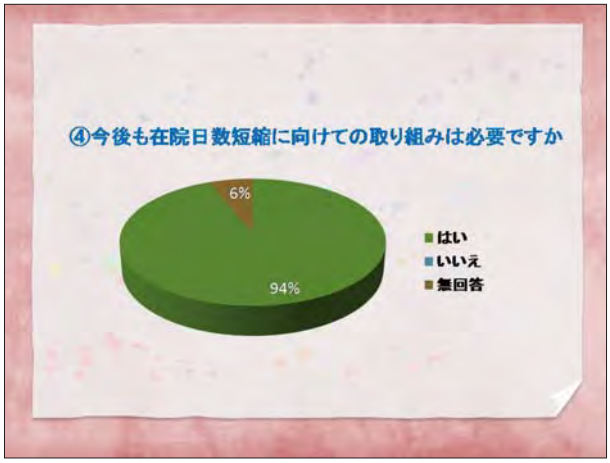
取り組み⑥　日々変化する介護保険制度・福祉制度の概要やサービスの種類・内容・申請の

方法を再認識し、退院指導に役立てることを目的として、当院ケアマネージャーによる勉強会を行った。

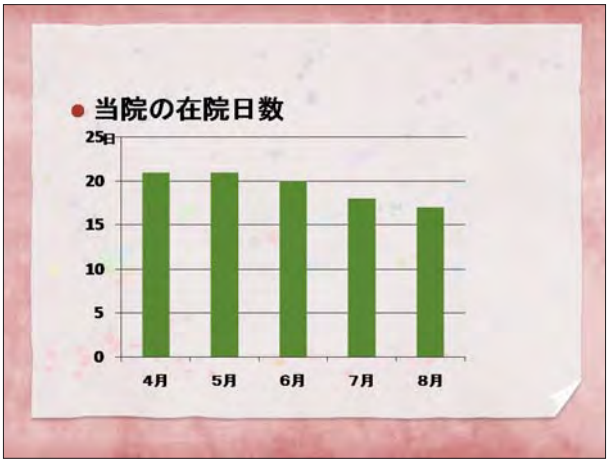
３ヶ月後のアンケート結果、ほとんどの看護師が在院日数について以前よりも考えるようになった。取り組み①．②の記載用紙は64％が活用でき、家族の希望や考え等把握できた等の意見があった一方で、家族が今後のことなどあまり書いてくれなかったため活用できなかったという意見もあった。主治医との情報交換は、日常業務に追われ医師と話せなかった、退院は医師の指示なので看護師からは話しづらいなどの理由で、約半数は情報交換ができなかったことがわかった。





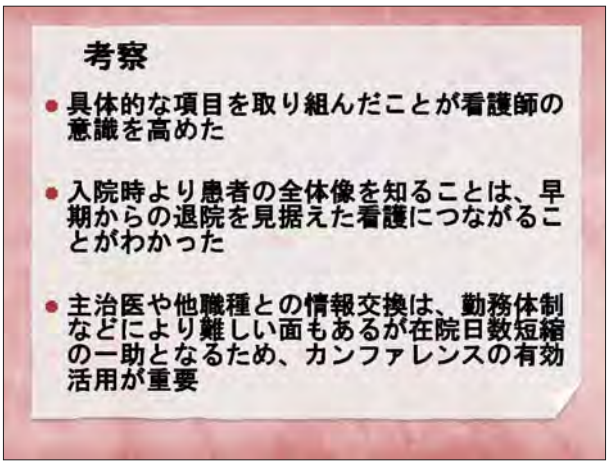


これは実際の当院の在院日数であるが、取り組み前の４月では21日だったものが、８月には17日と短縮された。



＜考察＞

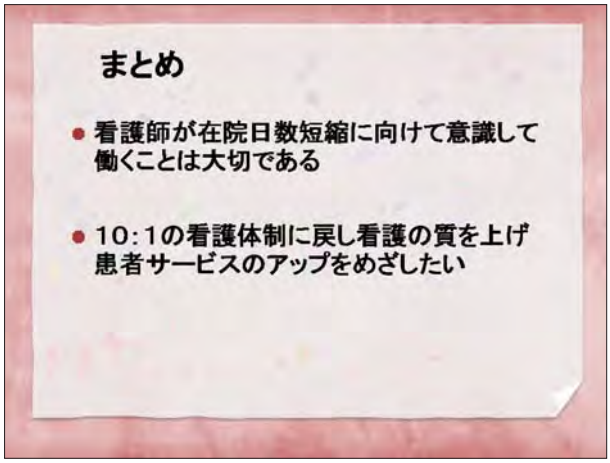
３カ月取り組んだ結果、在院日数短縮を以前より考えるようになった看護師が増えたのは、具体的な取り組み項目を挙げ取り組んだ事が、看護師の意識を高めたのではないかと思われる。入院時より患者の全体像を知ることは、早期からの退院を見据えた看護につながることが再認識できた。主治医との情報交換は、勤務体制などにより難しい面もあるが、在院日数短縮の一助となるため、カンファレンスの時間を有効活用し、今後も情報共有していくことが重要であることがわかった。

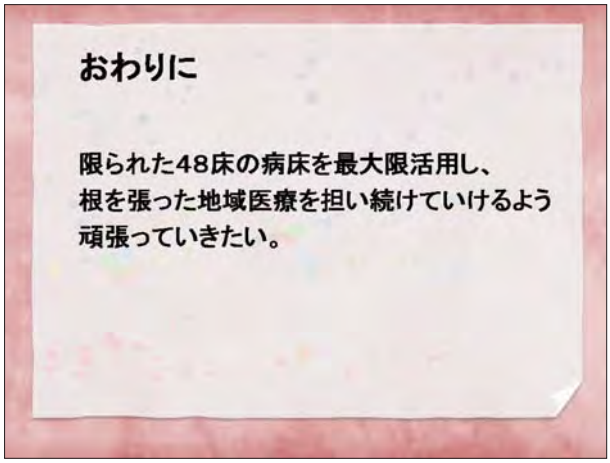


＜まとめ＞

看護師が在院日数短縮に向けて意識して働くことは大切である。

10：１の看護体制に戻し看護の質を上げ患者サービスのアップをめざしたい。



＜おわりに＞

私達は、限られた48床の病床を最大限有効活用し、根を張った地域医療を担い続けていけるよう病院スタッフ一同心をひとつに頑張っていきたい。